この夏こそ「じゃわめぐ」青森ねぶた

「じゃわめぐ」とは、ゾクゾクするような感動、興奮を指す津軽弁だ。大方の読者には馴染みの無い言葉だと思うが、青森ねぶた祭をナマでご覧になった方なら語感やニュアンスをご理解頂けるかもしれない。

祭りでは、戦国武将や故事・伝承を題材にした大型の山車が、目抜き通りを次々に練り歩く。引き手たちの息の合った綱さばきで、生命を吹き込まれたように躍動する華麗な人形灯籠。ずしんと腹に響く太鼓の律動、哀調を帯びた笛の音、ハネト（跳人）と呼ばれる花笠に浴衣の踊り手が絶叫する「ラッセラー」の掛け声…。それらが一体となった熱気と高揚感に沿道を埋める見物客も、じゃわめぐのだ。

北国の夏は短い。青森ねぶた祭が終われば、秋風が吹くとさえ言われる。それだけに、人々が祭りに寄せる思いは格別のものがある。2019年の祭り期間は、県内外から外国人客を含めて約285万人が訪れ、延べ10万人余りのハネトが乱舞した。

だが、世界を覆い尽くしたコロナ禍は青森ねぶた祭にも及んだ。昨年は感染防止のため開催中止を余儀なくされた。現行スタイルの祭りが1958年に始まってから初めての措置で、祭り関係者のみならず旅館・ホテルや料飲業界も大きな打撃を受けた。

例年なら祭りが開幕する昨年８月２日。弊社は「じゃわめぐ魂　次のねぶたで」と題した全面広告で、かつてない試練に耐えながら制作への情熱を燃やし続けるねぶた師の姿を紹介した。その後、ねぶた師14人はコロナ収束への願いを一つに、大型の特別ねぶた『願いの灯～薬師如来・玄奘三蔵と十二神将』を完成させた。

春の訪れとともに市内では開催準備が本格化。ねぶた制作の拠点となる作業場の小屋掛けも始まった。会期は８月２日から７日まで。運行も観覧もコロナ対策で不自由は免れないだろうが、多くの市民が「今年こそは」と２年ぶりの出陣を待ちわびる。それぞれの心に、ねぶた囃子がもう響いているかもしれない。

東奥日報社　広告局企画制作部長　畠山温光

コロナ収束への願いを込め完成した特別ねぶた＝昨年12月

青森ねぶた祭の中止を受けて企画した広告紙面
＝昨年8月